

目覚めると従姉妹を護る 美少女剣士になっていた2

狩野景

挿絵/天鬼とうり



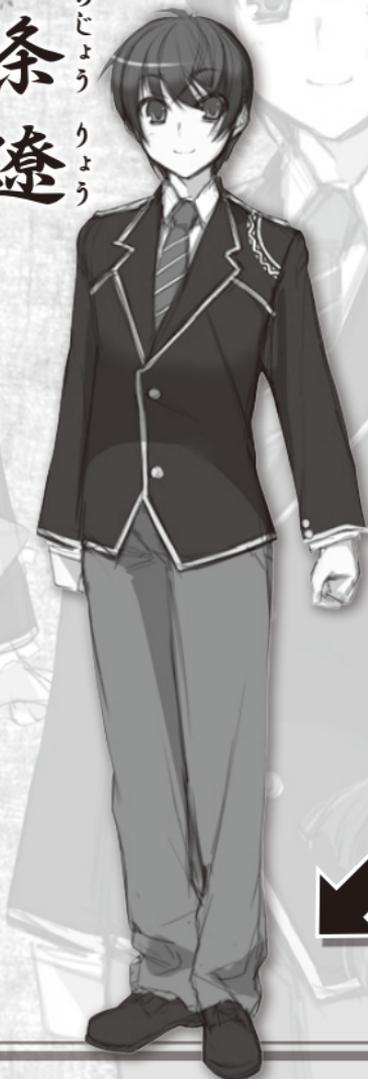
立ち読み版

登場人物紹介

退魔師を生業としている一族の分家筋に生まれた少年。何の因果か「鬼神姫」に選ばれ、身体を女性化させて鬼と戦うことに。女性化した時は、正体を隠すため「はるか」と名乗っている。

いちじょう
一条はるか

いちじょう
一条遼



↕
同一人物



いぬがみ
大神
いおん
伊音

さかたに
坂谷
きみ
希美乃

いちじょう
一条
ゆめ
結女

遼のクラスに転校してきた男の娘。あっという間に、男子しかないクラスの人気者になるのだが……？

遼と結女の幼なじみの少女。「羅刹童子」という鬼が転生した姿で、一時は鬼に意識を乗っ取られていたが、はるかの手で救われた。遼に片思いをしている。

遼の従妹で、恋人。鬼の賢となる「鬼慰姫」として狙われている。おっとりとしていて、人をあまり疑わない性格である。

あ ら す じ

ある夜、目が覚めると女になっていた一条遼。彼(彼女?)は鬼に襲われている従妹の結女を助け、結女が鬼に狙われる「鬼慰姫」に、そして自分がそれを護る「鬼斬姫」になったことを知る。遼の双子の姉「はるか」をでっち上げ、結女のすぐ側で護ることに。その身に宿った退魔の力で、襲ってくる鬼を倒すはるかだったが、幼なじみの身体に眠っていた鬼神羅刹童子の襲撃に敗北を喫し、陵辱されてしまう。しかし、「鬼慰姫」としての結女の力と「鬼斬姫」としてのはるかの力が覚醒したことにより逆転し、遼は平和な日常を取り戻したのだった。

「ああ、嬉しいな。まるで夢みたいだ。はるかさんが親類の家に戻ったって聞いた時には、絶望のどん底に叩き落とされましたよ。あなたを追って、その近くに引越そうかと思つたほです」

そうかい。追っかけていっても、そこにはるかはいないぞ。

「遼のヤツと入れ替わりでしかこちらに来られないって聞きましたよ。それならあいつはもう向こうに行つたきりでいいから、あなたはずつとこちらで暮らして下さい!!」

パンチ一発じゃ済まない。足腰立たないほど痛めつけてやろうか。

一人でテンション上げまくる友人に殺意が芽生えるが、どさくさに紛れて握り締めてくる手を払い退けることもできない。

(距離、ち、近い……つてば、気持ち悪い。お、男に迫られたつて……)

息がかかりそうな近くにヤツの嬉しそうな顔が迫る。

鼻腔に汗臭い体臭がむんとなだれ込んだ。

(——!! くつ、そうか……、熊組、前の時間は体育だった)

尻橋学園の女子クラスは桜とか桔梗ききょうなどの美しい花の名が付けられているが、男子クラスは熊だの猪だのむさ苦しい動物の名前が付けられていた。

(うう、男同士だと大して気にならないのに、いま、ボク、女だから……ッ!)

鬼神の精液の影響で昂つてきている感情が、男のフェロモン臭に煽られる。ただでさえ

女性の身体の敏感さに慣れず、ちよつとした快感にもエッチな気分になってしまふ少女には、耐え難い刺激だった。

「放……せつ」

強引に渡辺の手を払い退けようとする。

「はわっ！」

けれどもバランスを崩し、よろけてしまった。

転びそうになる身体を支えようと思つて、

「はっ、はるかさんっ!!」

目の前の親友にしがみついていた。しかも彼の腰にギユツと腕を絡みつかせ、逞しい胸板に撓わな乳房を押しつけて。

「あん……っ!! 〜〜〜〜〜〜〜〜っ!!」

過敏な乳房が押し潰される甘美な刺激に、意識せず喘ぎがこぼれ出た。

長身なため、頬を擦り寄せるようにして互いの顔と顔がものすごく近い。

その耳元にいまの悩ましい声を注ぎ込まれ、渡辺の理性は一瞬で弾け飛んだ。はるかから溢れる催淫のフェロモンに、顔が紅潮し目元がとろ〜んと危うくなる。

「大丈夫、ですか……? は、はるか、さん。お加減悪い……のでは」

お前の方が熱でもあるのではと言ひ返したくなるような顔を近づけ、抱きしめてくる。

「何とも、ない。ちよつとつまずいただけ……。教室、戻るから、放して」

身を離そうと藻掻きながら訴えかけるが、渡辺は抱きしめる腕を緩めるつもりはさらさらでないようだ。ますます視線を夢心地にぼやけさせ、スリスリ身体を擦りつけてくる。

(く……ううつ、やばい……。漏れて、きちゃったあ)

汗臭い体臭の異性に抱きしめられ、女の身体は本能に忠実な反応を示す。

膈内を満たした愛液が秘唇を割って溢れかえり、内腿に滴り始めた。

ショーツの布地はもうぐつちより湿って、股間にジトつと貼りついている。

「無理しちゃだめ、ですってば……。俺の子を産む、大事な身体、なんだから」

そんな気持ちの悪いこと冗談にすらならない。なのに、なぜかこの男の精液が勢いよく注がれた時の熱さを子宮が思い出し、はるかか頬を羞恥に染める。

(も、もう……。なんでこの身体、こんなエッチ、なんだよ。すぐ、変な気分、なつて、止まらなくなるッ)

一条家の超常の能力を発揮するため女性化した肉体だが、宗家の者のような修行をしていないため、はるかはその能力の源となる錬気という靈力を制御しきれていない。

本来敵と戦う際に高められる感覚が関係のない性感にまで及び、肉体を鋭敏にさせているのではと宗家の人に教えられた。

しかも、鬼慰姫を庇って鬼の注意を自分に引き寄せようと発する催淫香気が、気分が昂

ると際限なく垂れ流しになってしまう。

無表情を僅かに困惑させ真つ赤に色づく美貌は、渡辺の吐息をますます荒くさせた。

「ああ、そうだ、保健室で休みましょう。ベッド、ありますから……。べ、ベッド……」
興奮にグビリと喉を鳴らすと、渡辺ははるかを横抱きに抱え上げ、階段を駆け下りた。
「こ、こら、降ろせ！　いって言ってるのに。ベッド……とか、保健室なんか……つ」

（ううう、何の羞恥プレイだよ、これ……）

階段を降りきった一階は通常の教室がないため幸い誰の姿もなく、他の生徒に見られずに済んでホツとする。これが昼休みとかだったら、校庭や中庭に向かう連中に発見されてあつという間に学園中の噂になっただろう。

「別にどこも悪くないって言ってるだろ。それに自分の足で歩けるんだから、こんなふざけた真似、するなつてば！　降ろせよ、もうっ!!」

女性なら誰でも懂れるお姫様抱っこを身体が心地よく感じている。

それを否定するように、声を荒らげて逃れようとする。

だが渡辺は取り憑かれたような興奮状態で廊下を突き進み、保健室に到着した。

はるかを抱えたまま足を妙に器用に使って扉を開け、中に入り込む。

「せ、先生、いないな。これじゃ、看病………俺がするしかない、な……」

保健医の姿はなく保健室は無人だった。渡辺の目がギラギラと輝き鼻息が荒くなる。

「お、おい、どこに？ 降ろせてばっ、……ひうっ！」

イヤな予感が湧き上がる中、悪友は保健室の奥へ進みゆくと、はるかをベッドの上に降ろした。

（こんなとこにつ!! 休みたくなんか、ないのにつ）

清潔なシーツに身を受け止められる感触は、この部屋で幼なじみが醜い鬼へと姿を変え、大切な従妹に襲いかかった時のことをいやでも思い出させる。

鬼斬りの太刀『斬鐘』で希美乃に憑依したその鬼の霊体を斬り滅ぼしたことが、彼女の中で眠りについていていた羅刹童子の意識を人としての意識から切り離し、そして目覚めさせることとなった。

短い休み時間は終わり、次の授業の始まりを知らせるチャイムが鳴り響く。

「次、課題出た授業だから。教室、戻らなくちゃ……」
これを幸いに逃げ出そうと上体を起こす。

「だ、駄目です！ はるかさんは、た、体調、悪いんだからっ、ゆっくり休まないと!! 俺が付きつきりで看病しますよッ！ ね、熱ッ、あるんじゃないですかっ!! 顔赤いしッ」

自分の体調なら自分が一番よく分かる。それに顔なら渡辺の方がよっぽど真っ赤だ。ベッド上へと身を乗り出してくる彼の血走った眼差しに、思わず怯む。

「熱なんか、ないって……ッ！ これは、……気分で身体が火照ってるだけだから」

まさか発情がどんどん酷くなって全身が熱く疼いているなどと説明できるわけではない。煮えきらぬ拒絶を無視し、少年はベッドに上体を起こして座るはるか額へと掌を押しつけて体温を確かめた。

(体温計、使えってばっ)

何のために保健室にいるんだよと思う。それでもおでことおでこをくつつけあわせるよいうなことをされなくてホッとした。男の顔のアップなんて御免こうむりたい。

「た、大変だ……ッ、やっぱりなんだか熱いつ。そ、それにすごい汗掻いてる。ね、寝ましようっ、ここでっ、熱下がるまでゆっくり!! ぬ、濡れた服は、んふはあ、俺ッ、俺が、脱がせてやるから!」

「お、おい、冗談、やめろ」

迫る手を押し戻そうとして、逆に払い退けられてしまった。しかも彼ははるか両脚を跨いで膝立ちで向かいあい、いつでも押し倒せるポジションを確保している。元から冷静からはほど遠いヤツだったが、これはあからさまにおかしい。目つきが正気ではない。

紺のブレザーの下に着た純白のブラウス。

赤いリボンを結ぶその胸元を男の指が無遠慮に触れる。

「ひうっ!」

リボンが解かれ、上から二番目まであつという間にボタンが外された。

こんな時ばかりやたらと器用なヤツの指先に呆れる余裕もなく、声を引きつらせる。

「ほんとに胸おつきい、はるかさん。ほわ……あつ」

ボタンが外されるごとに、窮屈に収まった膨らみが胸元を押し広げて迫り出してくる。

白いブラに包まれた蒸し立ての特大まんじゅうに、渡辺がグビリと喉を鳴らす。

食い入るようにつめていたその身体がフェロモンの発情によろけて、はるかの胸めがけて突っ込んできた。汗ばんで匂い立つ牝房に顔が埋まる。

「う、うわっ!! ん……うっ!!」

甘美の感触から退くつもりはないらしく、渡辺は興奮の吐息を荒々しく吹きかけながら鼻面を谷間にめり込ませ、顔面すべてで双房の柔らかな弾力を存分に堪能している。

乱暴な刺激のない少し擦ったいような感触は、発情してすることも相まってかそれほど嫌悪を感じない。

(わ、わたなべ……)

それどころか、無我夢中で大好きな女の子のおっぱいにむしゃぶりつく親友を、ふと、可愛らしいとさえ思ってしまった。

(——!! ち、ちが……。お、男に、胸に顔埋められて、そんなことっ)
自分の本来の性別は男だ。

同性に欲情されて気持ち悪い以外の感情が芽生えるわけない。

でも男だから、こいつがおっぱいに夢中になる気持ちとはとてもよく分かる。

自分も元の身体の時は、結女の爆乳に顔を埋めるのが好きだ。

(で、でも、いまは身体が巨乳の女の子になっていているんだから、ちょっとくらいなら……。それに、この程度だと……。そんなに……。悪くない……。し)

心中に渦巻く感情を整理しようとして、ますます訳が分からなくなった。

「ン……。ンう……。」

乳房に埋まる顔が頬ずりに変わり、ブラジャーの下で強張り出した乳首を転がすように圧迫する。切ないような甘美が広がり意識せず喘ぎがこぼれる。

陶然と臉を閉じて身を預けてくる同級生の姿に、トクンと下腹の奥が波打った。

(ああ、おっぱいに、甘えられると、変な気分、してきちゃう……。)

それが母性の目覚めかもしれないと告げたら、はるかには半狂乱で否定するだろう。

けれども、乳房に与えられる穏やかな愛撫感に男としての自意識が生み出す拒絶感が、相対に薄められていた。

「わ、渡辺。ボクの、おっぱい……。そんなに、好き……。か？」

恥じらう声で、思わず尋ねていた。

「あ、ああ大好きッ。おっきくて柔らかいのに、張りがあって。甘くていい匂いをするっ!!」

その問いかけが、少年の理性を完全に吹っ飛ばした。

巨房を収めるブラの縁を甘噛みし、口だけを使って捲り上げる。

「ひうっ!! ああっ、そんなんっ!」

肩のストラップが外れ、ずれたカップから桜色に色づいた生巨乳がぶると弾け出た。

むわん、とより濃厚に発酵を強めた甘汗臭が溢れかえり、保健室を発情の香気に染め上げる。支えをなくしたというのに重力に逆らって張り詰める美麗な房が、圧倒的な質量を誇ってぶるぶると波打つ。

「ブラ着けててもエロい、生もつとイイ! は、はるかの、おっぱいイッ!!」

制服は完全に脱げておらず、大胆にはだけたブラウスから溢れかえってその完璧な美球を僅かに拉げさせていた。その様がむしろ裸で露出しているよりも数段いかがわしさを増幅させている。

自分が男の姿でこんな状態のおっぱいを見たら、やはり同じように感嘆しただろう。

なまじ男としての気持ちを知っているため、渡辺を叱る気になれない。

それでももうこれ以上を許してしまうと、引き返せないとところまで行ってしまいそうだ。拒まなくては。一発張り倒して、親友を正気に返らせなければ。けれども羅刹童子の精液を注がれた子宮が発情を強め、はるかの判断力を奪う。身体中の力を奪う。

瞬きを忘れた少年の凝視に恥じらいながらも、小刻みに揺れる弾力房を無防備に晒す。

その標高が高い突端で小さな乳輪と共に紅に色づき、ツンと充血勃ちする乳首へと、
「はる……か、好き、だあっ」

興奮に嗔れた声で愛を告げ、渡辺がしゃぶりついた。

「ひあっ！ やめっ、あ、舐め、るなあっ!!」

舌の先で転がされると、それに合わせて身体がビクンッと打ち震える。

唾液まみれのヌメつとした軟体が房肌を這い回り、蠱惑の快感を描き出す。

（ううっ、おっぱいばかり、ずっとおっ）

支えるように回した腕で腰を僅かに愛撫する以外は、すべての刺激を乳房に与えてくる。
舌先で乳輪を穿るようになぞりながら、指先がもう片方の乳房をゆったりと揉み拉げさせていた。朦朧と意識が霞んでいると、指の腹が乳首の先を僅かに掠めて擦ってくる。

「ひっ！」

たまらず息を詰まらせ戦慄いた。

別に他のところを触って欲しいわけではないが、煽られた股間が悶々とした疼きを強めている。

量を増して溢れ続ける愛液が、物欲しげな淫臭を立ち上らせて親友を誘い、はるか自身をも劣情の坩堝に引きずり込む。

（ふああ、股あ、おしっこ漏らしたみたいに、べっちょべちよ……。エッチなつゆ、自分

でも止められないから……。ああ、これって、もう、挿入られちゃう準備、できてるってこと、だよな……。ボクの、あそこの、なか……)

急かすようにキュンキュンと、膣穴が収縮を繰り返す。

子宮も心臓に負けない勢いで脈打っている。

(も、もう……。なんなんだよ、これ、もう……。ッ!! 渡辺の、ヤツう!)

妙な焦燥感が胸を満たし、理不尽な苛立ちを覚えるが、その憤りを向ける親友は相変わらず撓わな膨らみに執心していた。

柔房を揉みながら、時折乳首先を擦るのではなく、指の腹で充血した粒勃ちをめり込ませて絶え間なく捏ね回している。

(うう、く、ん、続けて、してくるから、おっぱい、火照り続けて……。アッ、ああっ)

抵抗感の強い男としての意識を、段階を踏んで刺激を増した愛撫が懐柔する。

その甘美と連動してしゃぶられ続けるもう片房の乳首に、ちゅば、ちゅるるっ、と渡辺が吸いついてくる。

「ひうんっ!! くうあっ。吸う、なあっ! ボクは、お前のママじゃ、ない、ぞおっ!!」

刺激としてはそれほど激しいものではなかったが、まるで乳飲み子みたいな親友の行為に妙な恥ずかしさが湧き上がる。当惑の表情で叱りつけると、その言葉が何か琴線に触れたのだろう。



(ボ、ボクって、これ……ち、痴女って、いうの、かな？　こういうの、って)
なに考えてんだと自分で呆れるが、そんな想像にもドキドキして変な楽しさが湧き上がる。

(薄井の、渡辺より長さないけど。すごく太くて、おま○こキツキツう。気持ちイイ……)
「ンン……。んふう……。はああ、あふう……。ふあああああつ」

思考の間にも、すでに鼻にかかった喘ぎが精液を端に垂らした唇から溢れ出ていた。

太股を抱え上げている級友に協力するように彼の腰へ両脚を絡め、首筋に両腕を回して身体を保持する。その体勢で挿入しているいわゆる駅弁スタイルという体位だ。結合しているだけでも女陰の中に体重の圧迫があつて、男根の感触が何倍にも感じられた。

——ぬぶつ。

薄井が腰を突き上げる。

「ふえああ……!!」

はるかが腰をくねらせ、その刺激を味わい尽くそうと待ち構えた。

官能の色香がさらに濃さを増しゆくその中で、背後から尻房を持ち上げられる。

「いひいつ!!　んあ、お、ほあああああつ！」

膣を極太で満たされ陶然としていたところへ、熟肉に指を食い込まされて背中に緊迫が走った。

「あ、ああ、あ、や、な、なに……!!」

顔だけをぎこちなく振り向かせると、視界の隅に小太りな級友の姿が映った。

「う、浦辺え！」

「はるかちゃんのおま○この中もよさそうらけど、拙者にはこっちの方が……。クヒヒ」
むっちりとした弾力の房肉を割り開いて中を覗き込んでくる。

（ああっ、なんてとこ、見てんだよっ!! こ、こいつ……ッ）

お尻の穴が丸見えにされた。すぐ下で怒張を目一杯に啜え込んでヌメリ汁を絶え間なくこぼす前穴を羨むように、菊皺をひくつかせむずむず蠢く排泄の穴に視線が突き刺さり、落ち着かない気分が込み上げる。

「ほあく、さすがは色白美少女。お尻の穴も綺麗なピンク色れすなっ!! くふふ、しかもおま○こに負けずこちらも濡れ濡れのべちよべちよじゃありませんか。こりは、なかなか、よさそうな……ッ!!」

（うううう、見るなあ。お尻の穴、なんかあッ。恥ずかしいッ）
ある意味女陰を見られるよりも、たまらない羞恥が込み上げてくる。

（なんでこんなとこ……? ——ま、まさかっ!!）

本当の女の子なら分からないままだったかもしれないが、はるかかの正体は性に興味津々な年頃の男子だ。当然そういうプレイがあることも知っていた。

案の定、浦辺は脈打つ勃起竿を尻の割れ目に宛がってくる。

「ちょ、ちよつと、待てっ！ そんなところにっ。む、無理だつて……」

焼けるように熱を持ちガチガチにいきり立った感触を、柔尻にめり込まされ焦る。

本来排泄するための穴なんかにどう考えても絶対に入るわけがない。

「ひゃうっ！ う、薄井も、いきなり子宮、突くなッ!!」

逃げようとするが、膣内の怒張がコツンと奥をかち上げた。

「——や、だめッ。入らないッ、てばっ！ うわっ、あ、あ、はあッ!!」

一瞬で身体中が弛緩し、弱々しく薄井の長身にしがみつく。

その隙に、ぬぼ、と菊門を押し広げて槍の穂先がめり込んできた。

膣も本当はイヤなだけどもう簡単に挿入られちゃうし半ば諦めてる。キモチ、イイ

し……。でもお尻の穴となると話は別だ。

もうすでに絶大な異物感が肛門を脅かしている。

「そうそう。そうやって身体の力を抜いてもらえりゆと、入りやすくなるれすよ」

全力で括約筋を窄めたつもりだが、弛んだ身体は僅かな抵抗すら示してくれていない。

ぬぶっ、ぬぶず。

「ひっ、ぎいっ！ はがっ!!」

浦辺が腰を迫り出し、直腸に熱肉がめり込んできた。

異物感は倍々に膨れ上がって、強烈な排泄欲をもたらす。

（う、あああ、入って、くるッ！ 尻い中にい、ちんこ、なんか、挿入る、な、ああッ）
逃げようと股間を前に出せば、膣内の剛直に子宮を奥深くまで押し込まれ息が詰まる。

「ぐふふ、お尻の中も、ヌルヌルらあ。ほらほら、ろろん挿入っへいきゅー！」

ヌチッ、ぬぷぷっ、ミチミチミチッ、ずぶんっ、ズッ、ズッ、ズズッ！！

「はあッ、ぐうううあッ！ やめ、んあ、あああッ！！ おごッ！」

膣から溢れ来た愛液と、直腸から滲み出た潤滑汁のおかげで、まだほぐれきっていない穴中にまでも勃起竿が順調に埋まりつつある。

どうせなら、受ける感触ももつと穏やかに弱まってくれればいいのに、もう頭が飛びそうだ。カリの縁に壁襞を刮げられるたび、視界に火花が散る。

「くふうっ、根本まで、挿入っ、たッ！ おほ、はるかちゃんのアナル、心地イイッ！！」

ぬずぶんっ！！ ぐじゅずぶっ！

「かひいっ！！ いやッあはあッ！ んあッ、あッあッあはあ〜〜〜っ！！」

ぶじゅっ！！ ぶびゅぶびゅびゅじゅうっ！

肛門に男根が根本までみつちりと埋まると同時に、ご丁寧にタイミングを合わせて前穴の勃起までズンと勢いよく膣奥を突いてきた。

激感に意識が弾け飛び、軽く達してしまい収縮するヴァギナから絶頂汁が飛沫を散らす。

（うう、ああ、完全、挿入られちゃったああ。お尻、にまでえ。ああ、だめえ。挿入つて
るだけで、どうにかなる。これえ！ やあ、抜いてッ、抜いてくれないとおつ、んんっ）

膣穴を埋め尽くされてる時の、身体も意識も弛み溶け崩れるような甘美と対照的に、
アナルへ挿入される感触は常に何かに急ぎ立てられるような落ち着かぬ緊張が続く。

双穴から湧き上がるそれぞれに強烈な快感に脳裏が混乱させられ、伶俐な美貌がいまに
も泣き出しそうに歪みおろおろと視線を漂わせる。

ハッ、ハッ、と駆けずり回った後の犬みたいな荒い息を続けていると、

「ああ、すぐくエロいよ。はりゆかひゃん。前も後ろもちろんこ突っ込まれて、男にしがみ
つきながら腰振っちゃってる……」

渡辺が保健委員と一緒に、興奮してペニスを扱き始める。

「——!! ふ、振ってたっ?! こ、腰い!! そ、そんなあ。ボ、ボク、あ、穴あ、まえ、も、
うしろも、お、犯されてえ。お、おとこ、なのにつ、ボクっ、ボク……あ、ああっ！」

自分の痴態を客観的に告げられて、興奮にますます歯止めが利かなくなった。

「ひ、いい、んうッ」

どれだけ引き締めても怒張を追い出せなかつた後ろ穴が、膣壁と一緒にキュイン、と、
狭く窄まった。

「くふああっ！ 締め、つけてきたっ!! はるかちゃんのケツ穴ッ、気持ちイイッ！」

「おま〇こも、ふああつ、すごい、窮屈にッ!! たまんねえつ、睦たまんねえッ!!」
 「ひいい、いやあつ! そんなこといつつちや、ヤあああつ!! 浦辺もつ、薄井もお、:
 …わ、渡辺もおツツ、ば、ばかあああつ!」

本当は男である自分の淫穴に友達が喜んでゐる。

倒錯的な悩乱に悶え乱れる。

昂り狂う興奮に、髀肉が連続してキュンキュンと収縮しつぱなしになった。

「ぬおおつ!」「はあああつ!!」

その双穴へと、前後から息を合わせたストロークが勢いよく繰り出される。

「ひあああつ!! はふあわわつ、い、いきなり、激しひつ! あつ、奥うツ、ああつ、はあああつ!! 突かれ、突かれるツツツ! んおほああああああつ!!」

立ち姿勢の相手に持ち上げられたまま挿入されているので、一回一回の突き込みが思いつきり深い。ガンガンと子宮と腸底を激しく叩かれ、そのたび意識が飛び白目を剥いた。

ずつぶんつ! ぬつぶぼつ!! ぐぶんつ! ぬぶつず!! ずつぶん、ずぼずぼつ!

(ひああ、壊れ、るうつ! ああ、お尻い、お尻キツいいつ!! ふあああ、おま〇こ縮まるッ、イクツ、何度もイッチャつてる! あふ、ああ、はあああんんんッ!!)

軽い絶頂が波のように何度も押し寄せ、際限なく子宮潮をビュッビュと噴きこぼす。

ぐちよぐちよのどろどろに潤滑を得て、ずぼずぼちんぽが出入りしているのに、腸内の

異物感は和らぐどころかますます強烈にはるかを追い詰め、忘我の悦楽へと溺れさせる。

「はああ、シャンプーのいい匂ひ。耳も可愛い形してましゆなあ」

髪をクンクンと嗅がれながら、浦辺に後ろから耳たぶをレロつと舐められる。

「へああつ！ ひやめりよ!! んひあああつ！」

いきなりのこそばゆさにびっくりして、ぼじゅ、と尻穴から腸液の塊が溢れ出た。

(はううう。やああ、変なの、漏れ……ちやつたあ)

まるで液体の放屁みたいな感覚に顔が真っ赤に染まる。

(ああ、もう、身体あ、気持ちよさで、どうにもならないつ。女の身体あ、気持ちいいつ。おま○こも、お尻んなかもお、ぜんぶ気持ちいいばかりいっ)

気持ち悪かったり恥ずかしかったり、キツかったりしても、結局それがすべて快感に昇華される。女の身体は全身が性感帯とかいうけれど、実際に体験してみても嘘じゃないって分かった。

ぬつぶんつ、ずぼつ、ずぼずぼ、ぶじゅん、ぐずぼつ、ぶぼばつ!!

「は、ああ、あつ！ んんッ、お、おとおおつ、あひつ、はへええつ!!」

身体中から滲み出る汗も、愛液のようにヌルみを帯びて、発情した女の肉体だけが醸し出す熟成しきった果実の香りを振りまいていた。

甘く爛れた淫汗を飛び散らせて激しさを増す前後からの容赦ないストロークに、はるか

の嬌声も慎みを失い、下品極まりなく乱れる。白目を剥いたまま呆けて開きっぱなしの口からヨダレを垂れ流し、えっへらと悩ましい笑みを浮かべよがり狂う。

「お、俺としてる時より、気持ちよさそうらなんてっ！ く、悔しいが、エロ過ぎるっ!!」

「ふあ、わたしにやべえ……?」

ツンと饅えた陰茎の生臭さにぼんやり窺うと、痴態に嫉妬しながらも興奮が勝った親友が、はち切れそうな怒張を自慰しながら息を荒らげる。

前後から男に挿入された駅弁体位。絶え間ない突き上げに上下する身体で、制服からこぼれ出たままになっている巨乳が暴れて弾む。

その小粒乳首がそそり勃つ完熟巨果実を、保健委員と共に左右から渡辺が揉み拉げさせる。

「——ひあああつ、こんな、とき、にい、おっぱい、なんてえ、だ、だめええつ!!」
ヴァギナとアナルだけでも許容範囲を完全に超えている。

乳房が弾む刺激だけでも困っていたのに直に、それも結構乱暴に、しかも乳首まで指先で捏ね捏ねされて、喜悦でいっぱい脳裏に甘美が無理矢理注ぎ込まれた。

「くううううううううんんんッ、はっ、ああああああつ！ ん、も、もおおおおつ、ああつ!! だめ、なの、にいいつ、イ、イクうううつ!!」

びじゅうっ!! ぶじゅぶじゅぶちゅっ! ぶっ、シヤアアアアア~~~~~ッ!!
 熱の塊と化した子宮から絶頂の煮汁が噴射され、極太の詰まった膣穴から失禁のように
 べちよべちよこぼれ出た。

牡肉をぎっちり啜えている潤み穴が、前後揃ってさらに激しい収縮で締めつける。

「はるかさん、イキながら、おま○こでちんぼすぐく締めつけてりゅうっ!!」

「ケツ穴もッ、すげえ、締めつけすげえ、気持ちよすぎるはるかちゃんのケツううっ!!」

「んあああ、俺のはるかあああっ!!」

「はるかさん、エロ過ぎいいっ!!」

どっぴゅうっ!! どびゅどびゅどびゅっ! びゆるっ、びゅぶぶぶぶっ!! ぶっぴやあ
 ああっ! どぶどぶどぶっ、ぶっぴゅうううっ!! びゅっ、びゆるる、ぶっぴゅうっ!

苛烈な締めつけに歓喜した前後の肉棒が脈打って膨れ、大量の白濁をぶちまけた。

「はぎいいっ!! んあはあっ、だ、射精されたあああ、ふああ。ああ、いっばいいっ、多すぎ
 い、ふあああ。ああ、おま○こも、お尻穴もおおっ! ふあ、ああ、ほああああっ!!」

息が詰まるほどの威力で穴奥を打ちのめす射精の勢いに子宮と腸を直撃され、ガクガク
 と全身が痙攣する中、渡辺と保健委員が扱く。ペニスからもおびただしい精液が放たれて、
 髪を振り乱す頭の上からべちよべちよと降り注ぐ。

女体の内側からも外側からも精子まみれにされて理性がもう危うい。



「くうっ、このっ!! 何とかできないの? あんたが呼び出したバカ犬でしょ!! 言うこと聞かせなさいよ!」

「だめだ、変に手応えがなくて、振り払えない。そのくせ、締めつけ……強すぎるっ」
三人とも完全に自由を奪われてしまった。

暴れても余計に絡みつき身体ががんじがらめにされる。

狼の本体の方はその間にも体表が赤剥け状態のグロテスクな様相となり、骨格が歪みゆく。その身体に至るところからおぞましい突起まで生えてきた。顔ではない部分にいくつもの顎が開き、無秩序に生え乱れた牙をガチガチと咬み鳴らす。

「ちよっと、やだこれっ、あわああっ!」

数を増して群がる触手に持ち上げられ、いよいよ身体の自由が利かなくなる。

粘液にまみれたヌメヌメの感触が気色悪い。

目の前で藻掻く希美乃を心配しながら、はるか自分にとわりつく肉ツタをどうすることもできない。勢いよく手足を暴れさせてもやはりゴムのように伸びるだけで千切れることはなく、それどころか急激な動作が災いして、水面の蛙のように手足が広がった形で頭を下げ尻をツンと突き上げたあられもない体勢となってしまった。

「あうっ、こんなっ! くそ、身体が自由に、ならないっ!!」

スカートが完全に捲れて張りのある熟尻を辛うじて収める純白ショーツが丸出しだ。釣

り鐘型の美麗な乳房は自らの重みでブラウスの胸元からこぼれ落ちそうになって、はるかの顎の先にまで迫ってきている。垂れ下がるのを防いで形よく整えるブラジャーも、逆さの体勢になってしまふとさっぱり役に立たない。

「な、なんて格好してんのよ、遼……」

本来は男である幼なじみの、女の身体で晒すエロい姿に希美乃が呆れ声を上げた。

「み、見るなつてばあつ！ 希美乃こそ、エッチな格好してるくせにっ」

その灰色髪に角を生やす少女も、制服が危険な色香を醸し出すスレンダーな長身をM字に開脚させられ、両手を小さくぼんざいさせた恥ずかしい姿勢を取らされている。

当然のことながら丈の短いチェック柄のスカートは捲れて、この身体には少し小さい白と水色ストライプのショーツが露わになっていた。

「——!! 遼こそ。へ、変なところ見ないでよつ、えつちつ！」

顔を真っ赤にして怒鳴られるとますます意識してしまふ。

互いに顔を背けながらもやはり気になって、横目にちらちらと恥ずかしい姿を盗み見る。(まいったな……。それにしても、希美乃、あんなちっちゃなパンツで、もしちんこ勃っちゃったらどうするんだよ……)

いまは大きめのクリトリスくらいでほとんど目立たないからいいが、羅刹童子の女陰と共に存在する両性具有の陰茎はかなりの膨張率だ。女性用の下着では隠しきれない。

あの熱く弾力的な、本来男であるはるかにとつて男性のものより抵抗を覚えないペニスの感触を回想し、一段と頬が火照つてくる。あれがにゅ〜つと挿入つてきて膣を掻き乱し子宮を突きまくる快感が脳裏に蘇つて、キュンと下腹が窄まった。

(ひうっ!! し、しま……ッ、ああ……)

その途端、収縮した膣穴から保健室で級友たちに散々注ぎ込まれた精液が、とろ〜つと垂れ流れてきた。伊音の指で羅刹童子の精液と共に掻き出されたと思つていたのに、連中のはまだたつぷり膣内に残つていたらしい。

慌てて窄める括約筋が逆効果となり、ますます白濁を絞り出す。

ぶじゅう……

微かな汁音まで鳴らして、あつという間に下着に染みを広げた牡液が鼠蹊部そけいぶから太股にまで溢れ出す。

「遑、あそこから……。その、白いの、なに……。まさか……!!」

「ち、違うッ、これはっ!! み、見るなよ、見るなつてばあッ!」

どうにか誤魔化そうとするが、うまい言い訳が思いつかない。両性具有となつて自分の精液を見たためか、希美乃は白濁の正体がなんなのか分かつたようだった。

「あんた、男のくせに、したの……? 男の子とっ。誰? 相手は誰なのよっ!!」

責めるような目で睨みつけながらも、何となく興味津々で相手を聞き出そうとしてくる。

「だから違うってばあ。気持ちの悪いこと、言うなあっ!!」

ひゅんひゅんと脈打つ膣壁がますます精液を押し出す。しかも困ったことに愛液まで分泌し始めたみたいで、粘度の薄まった白濁がどんどんと股間と両脚に広がる。

「希美乃こそ、なにそんなもの勃ててんだよ、女の子のくせにっ!」

「ふえ? はわあっ! 見ないでっ!!」

彼女も興奮したのか、開帳された股ぐらでショーツに収まりきらなくなったピンク色の肉竿が顔を出し、見る見るうちに大きさを増してゆく。

(あ、あああ、もう、あんなに……ッ!)

牡肉に膣を気持ちよくされてまだいくらかも経っていないためか、鏃型の生々しい形を目にするだけでドキドキが尋常じゃない。

希美乃の鈴口から滴る先走りに、じゅん、と愛液の量が増えた。

もう照れて顔を逸らすのも忘れて、幼なじみ同士が真っ赤な顔で互いのあられもない姿を凝視する。一緒に触手に捕らえられている男の子の状況を確かめる余裕がない。

「ひううっ!」「ひゃわああっ!!」

その二人の発情に煽られたのか、触手の蠢きが活発化した。

これまでは手足を中心に絡みついていた肉ツタの先端が制服の内側からも外側からも、乳房やお尻や脇腹を中心に敏感なところを狙って捏ね回してくる。

「ふああ、やめ、ろおつ、はあふつ、変なところ、ひつ、だめっつ、あつ、あんっ!!」
逆さに近い姿勢でブラウスの中の乳房が、上下に揺さぶられてたつぷんたぷんと弾む。男の胸にはない撓わな質量が暴れる感触は何度味わつても戸惑いを抑えられない。

(ん……ううう、いやらしい、よ、この変な触手うッ。ひいつ、そんなとこッ!)

しかも亀頭型に先細つた触手の先つぽが服の中でブラだけをずらし、充血した乳首を突いてくる。苛烈な甘い痺れに息を詰まらせていると、愛液と残留精液が溢れてぐちよぐちよに湿つたシヨーツの上から、秘裂をそわそわとなぞられ腰が抜けそうな虚脱に陥る。

「ふ……え、は、ああ……。——んひいいいあああつ!!」

弛緩した直後、陰核をぐりんと転がされ、脳がシヨートしそうな快感の奔流に全身を痺撃させる。軽い絶頂に見舞われ、はるかにはシヨーツ越しに、ぷしゃああ、と濃密で甘い牝臭の腔飛沫を溢れさせた。

「はあ、ううつ、恥ずか……しい。お、つばい、あひいつ! ちつちやい、のにいつ。あ
んっ、はあつ、ク……:……:ウウツ!! や、やあつ!」

希美乃の方も、触手が乳を弄んでいた。

膨らみが乏しいため房を弄られることはなく、だがその分だけ複数の触手によってたかつて乳首を刺激され、息も絶え絶えに喘ぎを弾ませる。

彼女のなだらかな隆起の制服に潜り込んでいる肉ツタは亀頭型に加えて、吸盤のような

先端を備えている物があつた。それが執拗に充血小粒へと吸いついてきて、気が遠くなりそうな疼きを呼び覚ます。

「ひぎ、あ、ああ、こんな、の……ッ！　こんな、のおおっ!!」

小ささ故に感度も絶大なおっぱいの生む甘美に驚いたように目を見開いて、それでも快感を認めまいと意地を張りながら身悶えた。

そんな鬼娘の股間へも触手は襲いかかり、亀頭型の先端で女の子の部分をかちよくちよとほぐして愛液を溢れさせる。吸盤型の先端が女性用シヨーツを押し上げてはち切れんばかりに屹立したペニスの先端をかつぷりと頬張りながら、蔓部分で竿幹に巻きついて上下に小気味よく扱っていた。

「ひやううっ！　や、ああ、うっ!!　だめえっ、はんっ、イヒイアアア——ッ！　射精するううっ!!　ふあああ、イっちやうッ、は、あああああ——ッ！」

微乳への刺激に張っていた意地が脆くも崩れ、ガクガクと全身を打ち震わせながらあられもない悲鳴を張り上げる。

（ああ、希美乃、あんなエッチな声ッ。ちんちんも、おま〇こも、びんびんのぐちよぐちよにしちやつて……。だ、だめだ、こんな触手、なんかに、ふあ、気持ちよく、されるう）

甘美に悶えながら、お互いの痴態からも目が離せず余計に悩ましい気分になる。

蠢く触手は二人が感じれば感じるほど活発さを増し、身体中に巻きつきつつあつた。

「く、ああ、やめ、ろお、ぼくは、召喚主だぞ。なのに、あううつ!!」

その中で、快感の余り状態を確かめることができなかつた女装少年が切羽詰まつた声を張り上げる。朦朧とした頭で声が出た方を窺うと、彼は手足に絡みついた触手に床に押しつけられ四つん這いにされていた。

女子の制服を纏つた、女の子にしか見えない華奢な身体。

スカートが捲り上げられ、丈短のドロワーズがさらけ出される。

その少女めいた下着が引き下ろされ、可愛らしい小振りの尻房が現れた。

屈辱的な姿勢を強いられるその上に、最早巨狼の原型を留めぬグロテスクな触手獣と化したジェヴオーダンの獣が巨体をのしかからせる。

「うぐつ、や、やめ……ッ!! うあ、ああああつ」

押し潰されそうな圧迫感に呻き、そして獣の股ぐらから隆々と勃起した表面イボだらけの極太陰茎に恐怖していた。

震える悲鳴を嘲笑うように、触手ではるか希美乃をよがらせる獣が腰を迫り出す。

伊音の青い果実のような小尻の狭間に、おぞましく蠢く巨根がめり込んだ。

「ひっ!?!」

それだけで背筋が弓なりに反り返って、腰が細く括れる少女めいた体型が強調された。下着の奥で、コチコチに強張つた男の部分がちらちらと見えなければ、やはり実は女の



子なのではと疑っただろう。

「はわっ！ そんな、なっ！！ ひ、あ、はあああ、やめッ！ ああああがああああつ！！」
お尻を激しく振りながら抵抗するがそれも虚しく、その太触手が男の娘退魔師の後ろの穴へとズブズブ埋まり込む。

甲高い悲鳴を響かせて背筋を限界まで反らせ、こぼれ落ちそうなほどに目を見開く。

「ぐ、ぐわ、あああ、うぞおとおお……」

急速に腸内を満たした剛肉の圧迫感に追い詰められ、伊音は全身を細かく震わせる。

可憐な退魔セーラー服がはだけ、きめ細かな白肌が赤らんで汗の粒が滲み出てゆくのが覗き見えた。苦しげに眉根を寄せ歯を食いしばる。

それでいてどこか恍惚としたように大きな瞳が涙で潤み悩ましく蕩ける。

その最中、太さを増して膨張した獣の怒張から、

——ぶりゆうッ！ ぶびぶぶびっ！！ どびゅぶじゅぶじゅううっ！

抽送もなしで壮絶な射精がぶちまけられた。

「あ、あああッ。だ、だめっ、がひィッ！ んがああはあああああッ！！」

腸奥を乱打される激しい圧力に白目を剥いて、狂おしい悲鳴を張り上げた。

巻きついた触手に行儀悪く広げられた両脚を、カクカクと小刻みに震わせる。

大量液があつという間に収まりきらなくなり、極太をみっちり詰め込まれたアナルから

噴きこぼれる。精液のようにどろどろと粘っこい、しかし精液とは似ても似つかぬヘドロのような腐臭を放つどす黒い液体が、男の娘の小さな尻から溢れ続ける。

ほつれた桃色髪を汗濡れた額に貼りつかせ、屈辱と甘美の狭間の切ない表情で唇を噛む。
(あ、ああ……伊音、くん……。——ひっああ、や、あ、クリ……。ずつと摘んでるうっ)

あまりの光景にもうなんと言っているのか分からない。しかも、希美乃と共に敏感どころを触手に愛撫され甘美が止まらない自分のことで精一杯だ。

「ん、あれ？ なんでこんなとこ……」

「寝ちゃった……。？ うそ、教室が……。!!」

そうこうしているうちにクラスメイトたちが次々と意識を取り戻し、状況に啞然とする。

「ひいっ!! なに、あれっ!! か、怪物……。ッ」

「う、そ、はるかちゃん！ 羅童らどうさんもっ」

「あ、ああ、可愛い男の娘の転校生まで……。っ！」

机の散乱した教室を見回し異形の魔獣に驚きつつも、全員の視線が一点で止まる。

「く、あ、あああ、みない……。でえ。ふえあああつ!!」

「や……。だあ、こんな……。とこっ、はあひいっ！」

恥ずかしさに涙目で訴えかけるが、少女たちは瞬きも忘れ凝視している。はるかも希美乃も狂おしい快感を堪えきれず、彼女らの目の前であられもなく悶える様を晒す。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

盗作死リムをルカは、は、ま、満、の、方、は、入、て、ま、ま、せ、ん、

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

<http://ktcom.jp/>

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! **11月発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!